

# 「短い長篇」の方法

——高橋和巳『散華』論——

湯 浅 篤 志

高橋和巳の作品の中で、『散華』ほど、テキストの中の「海」という一つのことばが、異質な他者に向かって開かれている小説はない。それはまた、これらの他者の間でことばが対話という運動を通して変容し、あるいは新たな情念を内包させながら、「海」という隠喩としてのことばを創り出す過程にほかならない。ここに長篇志向であった高橋の、初めて短篇小説を書くために模索した、意識の葛藤が現われていると思われる。

高橋は北川荘平宛の書簡の中で、自らを「長篇主義」と宣言しているが、それにもかかわらず後に短篇『散華』を書いた理由を、同じく北川に「これは短篇ではなくて短い長篇である」(傍点筆者以下同様)と「強弁」している。高橋は『散華』を「短い長篇」として自立させるために、テキストの構造を、ことばがその象徴領域において機能する仕掛けにした。つまりは「長篇」として『散華』を構成する力を「海」ということばに託したといえるのである。

たとえば、『散華』の末尾に置かれている中津の「日記」を「ただ作品を收拾するために作家が頼らざるを得なかった『機械仕掛けの神』」とする野島秀勝の指摘は、「海」に流れ込む他者の情念の集積を、また対話における思念の運動を、そこで無理に止めてしまおうとする論者自身の読解にほかならない。これでは高橋の「強弁」する「短い長篇」を構成する力を、安易に切り捨ててしまい、「日記」の象徴性を全く無視するものになる。「神」によって、小説世界を「收拾」し統合するのではないのである。

これに対して、磯田光一はこの「日記」に「戦後の現実においてもなお残渣として心の中にある」「あの青い海によって象徴される//日本的な死//の幻影」、言い換えれば「苦痛さえも甘美に包んでくれるところの、母胎としての//海//」を感じている。また松本健一は「日記」を「象徴的な日記」として、「海を毎日みていたのは、孤島に隠遁した老右翼思想家であるが」「いつのまにか」「特攻隊員の意識と重ね合わされ」「海の中で特攻隊員たちがみたまのものは」「蒼い蒼い海だけであ」り、「どこまでつづくかわからぬ海の底に、

死がある」としている。<sup>(5)</sup>私は両者のこういつた指摘に同意したいのだが、ただ不服なのは、これらが中津の「日記」を作者高橋の思想面へ照射させるだけであり、「散華」のもつ作品としての自立的にこの「日記」がどう関わるかという考察に欠けている点なのだ。

高橋は「散華」を書く際にその「意図」を、「戦争、および戦争中の精神の問題を、世代的に強調し、通じあわない不可能として押し出そうとしたのではなく、「むしろ断絶したものととして論じられがちなものに、何らかのつらなりを見いだしたかったから」と「散華の世代」の中で告白している。この部分を引用し、「風化した二人の対話の格闘に、作者はどんな解決もつけていない」とする田中貞夫や、「何らかのつらなり」を「戦争中に戦後におけるナツヲナリズム観のつらなり」に求めようとする宮本一宏も、作者の「意図」に結びつけようとするような従来の高橋論を踏襲しただけにすぎないのである。

高橋が「散華」で試みたことは、「何らかのつらなり」を読者に感じさせることなのである。それは今を生きている読者が過去を問題にすることで、その痕跡を自己の内部で組み換え、現在の自己の置かれてくる立場を解体させざるをえなくする方法だったのだ。そして「散華」は「短い長篇」という文体面からの方法的模索により、それを行なった実験だったのである。読者の枠組を解体させようとする変革力としての文体にテキストは支えられていた。したがって、作者高橋の「意図」は文体をとおして読者に向かって発せられていたのであり、その「意図」を作者の思想にのみ還元させようとするのでは、「散華」を読んだことにはならないのである。

テキストとしての文体を読むということではか、高橋の「意図」

が機能してこない構造に、「散華」はなっている。読者はまず冒頭部分から読み始めていくのである。

繰返し繰返し、こみあげてくる嘔吐を船首から海面に吐いて、自己に課せられた奇妙な任務を呪いながら目をあげたとき、目的の孤島は海峡のはげしい潮流に陥没しそうにみえた。波頭が島全体におおいかぶさってみえるのは、乗っている漁船が波間を浮沈するからだだったが、碧い無限の背景にくらべて、その島があまりに小さすぎたことも事実だった。

読み過ごしてしまえば、単なる大家次郎の船酔いの描写だけに終りそうなこの冒頭部分は、テキスト全体の表現の在り方を象徴するものになっている。それはまた、「奇妙な任務」という大家の認識に象徴される大家と中津の関わり方をテキストが暗示していることを現わす。

たとえば、「繰返し繰返し」「嘔吐」することは、大家が中津を訪れる度に「過去の痛み」を吐露していく過程を示すし、「漁船が波間を浮沈する」ように、大家の認識が揺らぐことも呼応している。

大家にとつての「過去の痛み」、戦争末期特攻隊員でありながら生き残ってしまった体験が、かつての国家主義者中津清人に会出うことで、自己の内部に湧き上がってくる。その過程を象徴的に表現したのが冒頭部分なのだ。「任務」のために「漁船」に乗り、そこで大家が「嘔吐」したことは、その「任務」と自己との葛藤が、「海」により暴かれたことを意味する。生理的な調節作用によって「嘔吐」が生じたのはいうまでもないが、「奇妙」ということばで「任

務」を「呪」うことが「嘔吐」を精神的に大家の内部から意味付けてしまふ。大家は自己の肉体失調を「任務」という枠に押し込むのである。逆に言えば、大家の葛藤はその枠の外から引き起こされたことを願っているのである。

「本州」と「孤島」の中間にある「海」で大家が身体的に平衡感覚を失った状態から、読者が読み進めていくとすると、この冒頭部分は大家の八宙ぶらりんVの状態を迫体験するための最初の設定になり、象徴的に書かれているのも理解される。それは高橋が「散華」執筆時に意識した「戦争、および戦争中の精神の問題」に「何らかのつらなりを見出す」ことの一つの仕掛けと考えられるのだ。

読者はこの設定からある像を思い浮かべ、テキストを読み進めることに、そこに新たな像を重ねていく。冒頭部分の像をずらし続けることで、高橋の「意図」した「何らかのつらなり」を読者は感じることができるのである。つまり、それは大家からの視点で統御されたテキストから抜け出ることでもあった。

果して読者はそこから抜け出ることができるのであろうか。大家と中津の対話が外に向かって開かれたとき、大家が「任務」という枠から外れたときに、読者は新しい世界を見ることができるといえるよう。

読者に最終的な像を喚起させることばは、テキスト末尾に置かれた中津の「日記」の「海」である。この「海」ということばこそ、大家のもとを離れた中津の声なのだ。テキストに即せば、中津の声は大家の発話に促されて出てきており、大家が触媒にならなければ、中津は「隠遁」したままなのである。しかしこの「日記」はそ

うではない。「新聞」というメディアに載り、読者の私に向かって自走してきてしまった中津の声なのである。

「散華」というテキストを読むことは、冒頭部分で大家の見た「海」を、読者が中津の「海」にずらししていく行為にほかならない。それにより、読者の中に「何らかのつらなり」は生成されていくのである。

そして、この運動は大家と中津の対話によって支えられていたのだ。これは大家の回想と中津の「孤島」への訪問が、テキスト内に対置されることで、過去と現在との時間的な対話、また「本土」と「孤島」という空間的な対話が成立する構造にもなっていた。読者の視点はその中で往復させられ、テキスト末尾の日記を読み終ったとき、初めて読者はその運動から解放させられ、世界が開かれたことを感じるのであった。

## 二

A 「誰だ、君は？」と相手が言った。

「……」

「釣道具ももっていないようだが、なにをしに来たんだね？」

「そちらへ、あなたのそばへ着いてから言いましょう」

「ならぬ」老人の鋭い声が返ってきた。

「わしの許しなくして、この島にくることは断じて許さん。帰れ」

B 一週間ばかり以前、彼の勤務する電力会社に四国と本州をむすぶ高圧海上架線の建設計画があって、有能な大量の社員が一時

に出張を命ぜられた。

(中略)

A'「こうして島の真中に立ってみると、わりあい広いんですな」と大家は不気味に黙りつづけている老人に向って言った。

これら引用部分は、大家が初めて「孤島」に上陸したときに、中津と交した会話部分(AとA')の間に、大家の「奇妙な任務」の経緯(B)が、挟み込まれていることを示すものである。このことは、中津の怒りに対する大家の返答が、いったん大家の「任務」の回想によって中断されることを現わす。通時的な「孤島」訪問の流れが回想によって、過去へ戻り向けられることが、大家の返答に対して「任務」の重みを付加させることを読者に感じさせる。それは「奇妙な任務」という具体的なフィルターを経由してからでない、大家の返答は読者に向かって来ないという構造なのだ。それゆえに、「わりあいに広いですな」という大家の返答は、「任務」を遂行するために直接的な「訪島」の理由を避けたと捉えられると同時に、大家の置かれた立場及び環境をも読者に呈示する仕掛けになっている。

大家の「任務」とは、彼の属する「電力会社」が「徳島県を横断して流れる吉野川の水力発電と、淡路島の完全電化、そして阪神工業地帯への高圧送電」を「第一義的な目標」として行なう「大鉄塔建設」のための「調査」である。そのため大家は「淡路島と四国の間をうすまぐ鳴門海峡のはずれにあ」る「孤島」へと、一人で赴くのである。「電力会社」にとっては、「第一義的な目標」のため「孤島」も中津の存在も取るに足らないものである。なぜならそれ

は、金銭が何よりも優先するという幻想に「電力会社」が支配されているからだ。それゆえ、金銭さえ出せば中津を「立ち退」かせられ、それがお互いのために「いい」と考えているのである。そして大家もまた、「なんの利用価値もなかった孤島に大都会なみの地価がつけられ、二十五年間の生活補償を加算して買いあげられ」、それにより莫大な利益を得るだろう「隠遁者」中津の「狼狽を想像し」「想念を停まらな」くするのであった。

この中津に対する大家の先入観が、「任務」を「奇妙」と形容したり、「呪」ったりする原因の一つになるのだが、基本的には、大家は自分の「任務」を遂行するために、中津に発することは戦略として選んでいる。中津に「だれに頼まれ」て「ここへ何しにきたんだね」と問いかけられると、大家は「わたし自身の一存です」と「嘘をつ」く。そのようにことばを操ることが戦略なのである。「嘘」をつかないかぎり「任務」を遂行できないと直感したので。このとき、大家は中津の「前歴を調査してこなかった自分の迂闊さをくや」む。それほど中津の存在は大きく、「この社会の基本的な約束からはずれた存在」と大家に思わせてしまうのだ。言い換えれば、中津は大家には異質な存在であった。

ここで重要なのは、大家のことは彼の「仮面」から発せられているということである。これらことばの群れは全て大家の「任務」に向かって収斂していく。そのため大家が中津にこだわる理由は、「はずれた存在」である中津に興味を引かれたというよりも、中津との出会いにより、自己の「過去の痛み」が内部にふつふつと湧き上がってきた点にある。そしてそれが自己の「任務」を遂行していくとき、障害になることを「予感」してしまいうえに、中津にこだ

わかっていくのだ。

読者はこれらのことを対話形式になっているテキストから読みとっていく。この原動力になっているのが、大家が「過去の痛み」を思い起こす場面なのである。その思いを大家が中津との関わりの中で、どう対処していくかを読者は見たいのだ。

大家は二度目の「訪島」の前に、友人野呂との会話から「抑圧」していた終戦の日の思いを喚起させられてしまう。

あの時に、おれたちが一齐に嫌だと叫んでおれば、天皇の権威はたちまち崩壊していただろ。

この思いが中津と関わる活力になるのだが、そこには「自分の存在と機能、過去の痛みと現在の職務を分離せず、ごちゃごちゃにしました」と大家に言わせてしまう端緒が、すでに開いていた。

では何故大家の「過去の痛み」が中津との対話から引き起こされてしまうのか。

中津を「どうせ死んでゆく病患者」に仕立て上げ、「自発的に」「もう一度世にでてみたいという気にさせ」ようとする大家の言説が、中津には通じないこと。大家が「二、三分喋ると、ふいに意識のエア・ポケットにのめりこむような墜落感におそわれ、口をつぐんでしまうことは、自己の発話が中津に理解されているかどうか、通じているかどうかを確認できない現われである。それにより大家の内部の葛藤が引き起こされてしまうのは、大家の「想念」が中津（他者）を自己の枠で意味付けたとき、大家に眼差された他者と大家の外部に存在する中津とがずれることにはかならない。その

ずれを埋めるために大家は中津に話しかけようとするのだ。しかし中津は「黙」っているだけである。それは大家にからめとられないための中津の戦略である。それゆえに大家は中津のことは・姿を自己の内部で処理し考えるしかなく、中津への先入観が「過去の痛み」を呼び起こしてしまっているのである。言い換えれば、「過去の痛みと現在の職務」のはざまでもしか、中津のことを捉えることができない。このような中津とのずれに拠所を求めようとする大家の思いを、テキストは対話という文体で支えていた。そしてそれが、読者を大家のもとに引き込み、読者の足元を揺らす力になっていたというまでもない。

### 三

それでは、中津の「日記」は『散華』というテキスト全体の中でどのような位置を占めているのであろうか。

中津は「孤島」に「隠遁」した「動機」を、「ひとたび思想として、他者に、とりわけ青年たちに説いた以上は、その説いたことに対して責任があると考えるゆえに」「みずから」を「一切の公職、一切の社会的交わりから」「隔絶した」とし、その覚悟をこらうっている。

わたしの墓はこのせまい島と広い海であり、わたしの音楽は風と松の梢のひびき、そして海の渦と嵐だけで充分なのだ。

この引用部分と中津の「日記」が、読者に中津の「海」を考えさせる手掛かりになり、そして、「日記」の機能がテキストとの関係

の中で明らかになるのである。

その「日記」にはこう書かれていた。

×月×日 晴天、海あおし

×月×日 今日もまた晴天 海あおし

×月×日 今日もまた晴天、海あおし

×月×日 晴、海蒼し、風吹く

×月×日 晴、海蒼し

×月×日 ああ、海よ

×月×日 海

確かにこの「日記」は、「一種の失語症におちいっていたもの」と連想させるに、充分な文体で書かれている。ことばを換えれば、ひつ、搔いたとも言える「毎日ほとんど同じような言葉しか記されていない」のである。

「日記」はテキスト末尾に何気なしに置かれているのではない。

それは「日記」が大家と中津との間に「何らかのつらなり」をつかさねる間テキストとして、読者の前に立ち上がってくることを意味するのであった。

「日記」の最初に記された「海あおし」は、三日間平仮名で書き続けられ、そして四日目には「海蒼し」という漢字に変わっていく。それが二日間続くと、今度は「海蒼し」が「海よ」に換わり、結局最後の日には「海」一文字に凝縮されてしまう。勿論、この「蒼」が「海」を修飾するだけでなく、空の「蒼」さを響かせているのはいうまでもない。ただ中津が、「蒼」という色にこだわって

いるのを無視できないのである。空の「あお」と「海」の「あお」は、「蒼」という色に吸いこまれ、そして様々の色彩を響かせながら、「海」に収斂していく。この「海」はそれゆえに、階調豊かな「蒼」という色合いを現わしている「言葉」になるのだ。

この「海」という「言葉」でしか、「日記」を書けなくなったときに中津は「死」という行為を選んだ。しかしこの「死」は、「死の哲学」に殉じる「覚悟の自殺」というよりは、もうこれ以上生き長らえることのできない肉体にとどめを刺した、ということではできないのだろうか。というのは、中津の「死体」の「ミイラ化した腹部」には、「刀剣」が「軽く」「つきささっていた」からである。「軽く」とは、生命の流れを断ち切る「死の哲学」にはふさわしくない「死に方」なのだ。

中津が死ぬまでの経緯をふり返って見れば、それは理解されるだろう。

大家は七度目に「訪島」したとき、中津に「たちのき」ということばで迫っていった。これに対して、中津は「日本刀を持」ち、「大家の前に立ちほだか」り、「資本主義」の「圧迫をはねかえすためにとらざるをえぬ一つの」案になる。そして大家は「切りつけ」られ、「小屋の隅へ」と「追いつめられ」「激怒」する。

これは大家にとって、「じっと魚雷の中にうずくまって、出撃を待」つことに等しい。逃走できない、退引きならない情況にたがはめされた大家は、「過去の痛み」を「現在の職務」の中で爆発させてしまうのだ。

おれはいまは一介の俗物にすぎない。しかし、それゆえに、一

人高しとして孤独を守る人間を本質的に信じないんだ。あなたには解るか。やがて死んでゆかねばならぬ人間が、自己の存在の痕跡を残したいと痛切に思う気持が……。

大家にとって「過去の痛み」とは、「自己の存在の痕跡を残したいと痛切に思」った「気持」に対して、どのような生き方をするべきかということなのである。それを中津に向かってことば化することは、現在まで生存してきた自己に決着をつけることであり、言い換えれば、「過去」の自己を組み換え、それを「現在」に向かって開かせる行為にはかならないのだ。それは自己を「任務」から解放させる力でもある。それゆえに「追いつめられた」大家は、「じりじりと戸口から戸外へ後退する老人にむかって」「鉄瓶を投げつけ」る暴挙にでたのである。

ことばで「立ち退」かせようとする「法律家」としての「現在の職務」から、「暴力」によって、中津へ立ち向かうことへの組み換え。「暴力では何も解決」できないことを知っていた大家は生命の危機を前にして組み換わってしまった。そうなると、この大家の「暴力」はどのような意味をもつのであろうか。

それは「手段ではなくて」「その存在の宣言」(W・ベンヤミン「暴力批判論」)になるのだ。自己が「存在」しているという「宣言」は、「自己の存在の痕跡」に触れたときに発せられる。目的のためにでもなく、手段のためにでもない、「その存在の宣言」のために「暴力」が遂行されるのだ。大家の「宣言」は同時に、「仮面」のもとで生きていけなくなった「宣言」でもある。

その大家の「暴力」により、中津は「顔の半分を熱湯でただら

せ」てしまう。そのうえ、大家に「鉄瓶を投げつけ」られる「一週間前」には、中津は「しつこい風邪」をこじらせ「病床にふせて」いた。大家はそれを見て、薬を運んできたが「結局」中津は薬を「飲まなかった」のである。こうなると、ろくな治療薬や器具のないこの「孤島」で、「顔の半分」の火傷を回復させるのはほとんど不可能になる。しかもまだ中津は病み上がり体なのだ。すなわち、中津の「日記」は自己の「死」を意識しながら記述したといえよう。「死」から逃がられない日々を、この「日記」を書くことで生きながらえたのである。

中津は戦争中、「精神の物質に対する優越を懸命に説いた」が、「期待をかけた兵士たちと運命をともし」せず、自己の「理論の要求する生き方と死に方を十全になしえなかった」と大家に告白している。この思いが、中津が「死」を目前にしたときに、「日記」のような「失語症」的文体を生み出していくのである。その文体は「生き方と死に方を十全になしえ」ている中津そのものなのである。「海」が「生き方と死に方」という相反する価値を内包していることばになるのだ。中津の「存在の宣言」が「海」ということばで終ったことは、「海」が自らの「散華の思想」を全うする最後のことばになると同時に、新しい世界でつかわれた最初のことばになる。つまり、ここで初めて中津は自分自身のことばを獲得したといえるのだ。そのことばを獲得する過程が、「日記」の文体なのである。「日記」は、日一日毎に短くなっていくが、実は中津のこの心情は大家へのことばの中に隠されていたのである。中津は大家にこう吐露している。

わたしがお日本語を覚えていくということと日本人の一人にかぞえられるなら、わたしはこの言葉をお忘れない。わたしには鷗の叫びがわかり、猫の意志を理解できる。わたしはそれで充分だ。

中津が「日本語」という「言葉」を「忘れ」ようとした過程が、この「日記」に滲み出ているのである。またそれが、文語で表現されているということから、文語としての書き「言葉」を「忘れ」ようとしたとも思われる。さらに「日本語」の書き「言葉」の機能からも、逃れようとしたのだろう。その思いは「海」という一文字に収斂していく。「日記」の七日間は、大家と中津との七回の出会い、対話の日々を象徴しているかのようだ。ただ、一文字「海」という「言葉」を書き、死んでいった中津は、「このせまい島と広い海」を「墓」とし、「鷗」や「猫」と対話をはじめていったのである。それは中津が獲得した新しいことばによって話されたのであった。

このように中津の「海」への思いが「日記」に凝縮され、それが読者の前に立ち上がってくる時、「日記」はテキストを照らし返し、大家の見た「海」をも、そこに内包させてしまうのである。なぜなら「日記」は大家と中津の出会いがなければ書かれなかったからである。「日記」はテキストを統合するのではなく、中津が大家との出会いの中で生み出した「痕跡」であり、「存在の宣言」でもあるのだ。そして、この「日記」で「散華」が閉じられるのは、読者に向かって中津の「海」を、「失語症」的な詩的な文体で感じさせようとする高橋の、苦しいまでの方法的模索だった。

読者がそれに答えなければならぬ、対話のための「日記」だっ

たのである。

#### 四

中津の「海」とは過去のことばと新しいことばが交錯している場所なのである。大家の見る「海」とは違う海を中津は「海」に見ているのであった。

大家は中津の言うように、「海」が「美しいときしか」見ていないのである。自分に都合の良い「自然」しか見ていない。そのために、四度目の「訪島」のときには、「浜」で「まて貝をとる」の「久しく感じたことなかつた喜びの湧きおこるのを感じ」、「娘のちか子を一度つれてきてやれば、きっとはしゃぎまわることだろう」と夢を見るのである。また「自然に帰」り「ふたたび汚れなき青春の交情をとりもど」すための「海」でもあるのだ。大家は「現在の職務」から解放され、自己を安息させる場として「孤島」の「海」を利用するのである。そして再び、熾烈な「資本主義」のもと、「電力会社」の「有能な法律家」の姿に帰るのであった。つまり、大家にとっての「海」は「職務」を活性化させるための避難所なのだ。中津に言いふくらめられそうになったときや「任務」がうまく行かなくなったときに、「海」を思い起こすのは、単に逃避としての「海」というよりも、「資本主義」社会に適応するためといえるのである。

しかしこのような「海」に一回目の「訪島」のときは「嘔吐」させられてしまうし、また五回目にも「渦」に流され、命を奪われそうになる。「海」の「法則性」のない「渦」に、大家は揺ぎをかけられるのである。そもそも、「渦」というのは「潮」の干満

によつてできるのであるが、このような大きな自然を意識しないところに、大家は海を見ていた。そして、この「海」の一面しか見ないという大家の認識が、「生活水準の上ることが善である」といった幻想に支配され、これを維持し続けるために「仮面」をかぶらなければならぬのである。「海」は「仮面」を取り去る場所として、大家に選ばれたのであった。

「電力」という「近代生活に欠くことのできないエネルギー源」を武器にして、「あまりに小さすぎた」「孤島」さえも、乗っ取ろうとした大家の「任務」は、「阪神工業地帯」を頂点としたヒエラルキーのための「職務」だったのである。大家の「海」は、この中心のために管理された作られた自然といえるのだ。

ここで再び冒頭部分に戻れば、「本土」と「孤島」の間の「海」で大家が「嘔吐」したことは、大家の身体が中津の「海」によつて、播がされたことを現わしていたのだ。大家は主観によつて身体を統合しようとした結果、「奇妙な任務」という「仮面」をかぶってしまった。一方中津は、「海」にあらゆる可能性を見出し、それと自己とを統合しようと、「日記」に「海」ということは残し、死んで行ったのである。冒頭部分の「海」が中津の「海」を暗示させ、そこに向かつて冒頭部分がずらされていくのが、この『散華』というテクストの構造なのである。これにより『散華』は「短い長篇」としての自立性を獲得できる。なぜならば、テクストが読者に向かつて開かれることにより、その関係性の中で、高橋の「意図」した「何らかのつらなりを見出し出すことができ、テクストを読む行為により、『長篇』性を読者の中で創り出すことができるからである。『短い長篇』という扱ひ曲げられたことばでしか、『散華』を表現

できないところに、高橋の「戦争、および戦争中の精神の問題」はあった。昭和三十八年という経済高度成長の陰りが見え始めた時代、あるいは政治の時代が高橋に『散華』を書かせたのかもしれないがしかしそれは一つの解釈である。読者は常に今、テクストと接して、新しいテクストを生産しているのだ。

たった一つの「海」ということばで、『散華』というテクストから訣別した読者には、大家の「海」も中津の「海」も、多層的に重なり合い、相互浸透しあったことばのつらなりとして感じられる。それはまた、読者の中で、中津にも大家にも開かれた「海」を感じることなのである。ここで読者は自分たちの「海」を見なければならぬ。そこに読者の抱えている問題があり、高橋の「意図」した「何らかのつらなり」も横たわっているのだ。

中津と大家の対話は「海」の世界を拡げていく。それは高橋によつて意識的につけられただろう「中津清人」と「大家次郎」という名前も「役買っていたが、それよりも名前が単なる比喩に終わることなく、さらに高次のコノテーション<sup>(13)</sup>まで馳せのぼる「生きた隠険」<sup>(13)</sup>になつていたことにある。そこで突然、情念としての「海」が読者の目の前に開けてくる。戦後とは一体何を足場に成立、発展してきたのであろうか、と。まさにこの瞬間、読者は中津と大家が「何らかのつらなり」をもつたことを感じるのであった。

「海」ということばは、戦中の論理に固執した中津清人が自ら「孤島」にひきこもつたことと、戦後の論理を生きはじめてしまった「本州」とを隔てる、境界を象徴するものであった。一方戦後の論理を實踐していく大家次郎にとっては、エネルギーを供給する電力の架線によつて「孤島」と「本州」をつなげる際の障壁を現わし、

それを克服することが重大な「任務」であったのだ。その隔てることと、つなげることとの葛藤の場として、二人の間に「海」ということは変転する意味作用を開始しはじめたのであり、大家の「嘔吐」はそこで吐き出されることばの象徴でもあった。そして「海」ということばは戦中、戦後を架け橋するあらゆる思想・方法に読者を誘う場になるのである。

さらに、この「短い長篇」は「海」ということばにより、大家と中津のアゴリアを限りなく読者に喚起させ、読者自身自らそこに向かって、ことばを発していく場にもなっていた。そこから自分自身の長篇を織りなしていく対話の場として「海」は蒼く光り輝いていたのである。

「海」はまさに「散華」としての言語だったのである。

註(1) ここでは商業誌に掲載されるという規準で「初めて」ということばを用いた。初出は『文芸』昭和三十八年八月号。

(2) 「高橋和巳の手紙」世に出るまで——「海」昭和四十六年七月特大号参照。

(3) 「ナショナルリズムと死——『散華』について——」『海』前掲書所収

(4) 「ノ有罪性が希求の文字——『散華』『墮落』『憂鬱』なる党派」を中心に「『文芸』昭和四十六年七月号所収

(5) 「墮落への情熱——『過去』と『現在』の二重の思想的意味」

『戦後の精神——その生と死——』所収

(6) 「高橋和巳小論」覚書——「散華」「墮落」を視座として——

早稲田大学教育学部「教育語国文学」昭和四十八年四月号所収

(7) 「散華」論——刺客的行為の視点から——・「高橋和巳研究」(小川和佑編) 教育出版センター所収

(8) この「大鉄塔」は実際の日本最高の大鉄塔をモデルにしたと思われる。「日本経済新聞」昭和三十七年十二月四日発行第十三版参照。そこには「中四国連絡送電線が完成・海峽空線では世界最大」とあり、鉄塔の写真も見られる。

(9) このような存在をジョルジュ・パタイユは「異質的存在」としている。cf. 『フアシズムの心理構造』『ドキュマン』片山正樹訳(二見書房)

(10) ジュリア・クリステヴァの術語。『どのようなテクストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テクストはすべて、もうひとつの別なテクストの吸収と変形にはかならない』ということ。

(11) 詳細は『記号の解体学セメイオチケ』(せりか書房)を参照  
ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』野村修他訳(晶文社)所収

(12) 『姓氏家系大辞典』角川書店によれば、「大家」は「オホヤ」と読み、大宅(オホヤケ)と同じ用いられる。大宅系図にはその子孫に高橋(タカハシ)が見られる。(第一巻一三三五ページ・第二巻三三一八ページ参照)。これと高橋が次男であったことを重ね合わせるならば、「大家次郎」という氏名は高橋自身の比喩と考えるのは深読みだろうか。さらに「中津清人」との関係で「大家次郎」を捉えるならば、現在の大分県中津市に大家(オホヤ)邸が入っている事実が挙げられる。(『日本地名大辞典2』日本書房及び『角川地名大辞典44大分県』を参照)。読者にこれら地理的・歴史的事実を呼びおこさせる名前になっているのだ。

(13) 詳しくはポール・リククール『生きた隠険』久米博訳(岩波現代選書)参照。

(14) この論で用いられている「情念」ということばは、「社会化された情念」(『現代情念論・人間をみつめる』中村雄二郎・勁草書房)を基に展開されている。